

医師・看護師・介護職員的大幅増員を 日本医労連増員闘争ニュース

第 83 号

2010年5月7日

日本医労連増員闘争本部

TEL: 03-3875-5871

FAX: 03-3875-6270

「看護職員の労働実態調査」中間報告 報道の第3弾

「連合通信・隔日版」2010年5月1日

74%が慢性疲労訴え／日本医労連の実態調査／看護職の心身は悪化の一途

看護師などをつくる日本医療労働組合連合会（日本医労連）は四月二十六日、看護職員の労働実態調査の結果を発表した。人手不足による過密労働が看護職員の心身をむしばんでいる現状が明らかになった。調査は昨年十一月から今年一月の間に組合員の看護師や保健師、助産師らを対象に実施し、二万七千五百四十五人の回答を得た。

それによると、「疲れが翌日に残る」などと慢性疲労を訴える人は七三・五%に達し、自覚症状に「全身がだるい」を挙げる人も五二・四%いた。「イライラ」（四〇・八%）「憂うつ」（三七・八%）と心の不調を訴える人も多く、精神安定剤や睡眠薬、抗うつ剤の常用者は延べ三千四百人を超えた。

妊娠した看護職も危険にさらされている。約三人に一人が流産の前兆である切迫流産を経験し、二十年前の調査より一〇ポイント増えた。出血やひどいつわりに悩まされた人も相当数に上った。サービス残業が横行し、昨年十月時点で六割以上が「ある」と回答。五十時間以上（百三十七人）という例もあった。

回答者の約八割が「いつも」「時々」を含めて仕事を辞めたいと思っていることも分かった。自由回答には「仕事が多すぎてパニック寸前」「いつミスをするか不安」などと、職場の危機が切々とつづられている。日本医労連は「この実態は患者の医療に影響を及ぼす。看護職員の増員は不可欠だ」と指摘している。

「時事通信」5月4日

看護師の3人に1人、切迫流産＝慢性疲労7割超、薬使用も増加－医労連実態調査

看護師の健康状態が20年前と比べ一段と悪化し、妊娠時に3人に1人は流産しそうになる「切迫流産」を経験していることが、日本医療労働組合連合会（医労連）の実態調査で分かった。慢性疲労を訴える人は7割を超え、岡野孝信中央執行委員は「人手不足がさまざまな問題の根源にあり、解消する必要がある」と話している。

昨年11月～今年1月、全国の看護職員に調査票を配布。約2万7500人の有効回答を得た。

「疲れが翌日に残る」と「休日でも回復しない」を合わせると、73.5%が慢性疲労の状態で、1988年調査より7.2ポイント上昇した。「全身がだるい」「腰痛」など自覚症状を訴える人も増えており、健康状態の悪化が目立った。

何らかの薬を常用している人は約6割。多いのは鎮痛剤、ビタミン剤など。睡眠剤（6.9%）や安定剤（4.3%）は88年調査に比べ倍増していた。